

援農ボランティア事業の実施に係る経緯と展開

著者	今野 聖士
雑誌名	地域と住民：コミュニティケア教育研究センター年報
号	3
ページ	31-40
発行年	2019-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
論文ID (NAID)	40021940896
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001795/



研究報告

援農ボランティア事業の実施に係る経緯と展開

今野聖士*

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：農業雇用労働力 労働力不足 援農ボランティア

1. はじめに

昨今、産業全体で労働力不足が叫ばれている（その要因については一考の余地があるが本稿では割愛する）。農業においても労働力不足は深刻化しており、とりわけ季節的な労働力需給のピークを有する青果物等において、影響が大きくなってきている。地方部、特に都市部から十分な労働力を調達することのできない遠隔地にある農村地域では、雇用労働力不足が農業生産場面に直接的な影響を与え、非機械化品目の作付減少といった“実害”が生じはじめている。名寄市においてもそれは例外では無く、収穫時の人手不足を理由に特産の青果物の作付面積が減少（一方で機械化可能な耕種が増加）している。特にアスパラガスは収穫時が2ヶ月程度と短い事に加え、収穫のピークが一気に立ち上げることから雇用労働力に依存する部分が多く、昨今の労働力不足を反映して、作付面積の減少（更新の中止・延期や収穫量が少ない品目への転換等）が生じている。

このような状況下において、農業者から市役所・農協等農業を支援する立場の機関へ何らかの支援を期待する声が寄せられるようになった。また、筆者のところにも講義等で関係性をもった農家から労働力不足の状況や、学生アルバイトの募集に関する相談が寄せられるようになった。そこで、農家のアルバイト募集の情報を学生に何らかの形で紹介できないかと考えた。何人かの学生にインタビューを試みたところ、ほとんどの学生は飲食店・小売店等でアルバイトをしているが、農業に関してはあまり知識や関係性が無く、農業がアルバイトの選択肢に入っていないことが示唆された。農業アルバイトは名寄ならでの経験を得ることができ、金銭以上の体験を得ることができると考えられるため、関係機関と協議の上、試験的に講義で関係性のある農家とのマッチングを試みることにした。

2017年、今野の講義終了後に学生に対し軽く呼びかけたところ、数名がアルバイトを希望した。その後も散発的に希望があり、計20名程度が参加表明し、実質的には15名程度が従事した。雇用時のトラブルを防止するため、学生の受け入れ経験がある農家とマッチングすることを考え、筆者が学生の希望を取りまとめ、市農務課にアルバイトを希望する農家の紹介を依頼、市農務課のグリーンツーリズム推進協議会担当職員が構成員に照会を行い、マッチングする仕組みを構築した。あくまでも実験的であり、紹介後のアフターフォローはなく、契約・調整等は学生と農家が直接連絡を取り合っている形式であった。

極めて限定的とはいえ、20名近くの参加者があり、学生・農家双方から継続展開を求める声があったことから、関係機関と協議の上、事業実施を検討することとなったものである。

2. 援農ボランティア事業実施体制の検討

1) 組織

前述の試験事業の結果を受けて、一時的なもので無く、安定した事業に向けて組織作りを進めることとなった。筆者、名寄市役所担当課長、JA道北なよろ担当課長の3者を中心に数回、実施に向けて事業内容・運

*責任著者 E-mail:m-konno@nayoro.ac.jp

営方法の検討を行った。主な項目はスケジュール（後掲表2の通り）、受入体制、雇用条件の統一である。受入れ体制は、「名寄市立大学生援農アルバイト事業」とし、関係機関にそれぞれ担当を設置した。大学は名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター（担当：センター企画委員兼本研究事業担当の教員）、市は経済部農務課（担当：課長）、JA道北なよろ（担当：営農部営農課長、アスパラ部会長）とした。大学は、コミュニティケア教育研究センターが通常のボランティア支援に準ずる形で各種支援（問い合わせや募集など）を実施するほか、本事業をコミュニティケア教育研究センター課題研究として採択し、事業実施に係る費用の一部、また研究を実施するに当たっての費用を支援する体制を取って頂いた。費用は主にリーダー役の学生に対する作業日誌入力およびアンケート回答に対する謝礼（リーダー手当相当）、研究に係る消耗品の購入である。

また、市および農協等が構成員となっているファームサポート協議会から、学生が使用する長靴・作業着（ツナギ）・雨合羽の貸与を受けることとなった。これは、農業がアルバイトの選択肢に入らない理由として、作業内容がイメージできないことに加え、準備するものにかかる費用が高いとの意見が学生から出ていたためである。このことにより、調整の煩雑さは増すものの、学生の参加するハードルが下げられたと思われる。

また、アスパラ終了後、そのほかの作物においても同様の援農ボランティアを期待する声があったが、馬鈴薯は機械作業を伴う事、カボチャは1部作業が重労働である事からペンディングとなり、時間帯は早いものの重量物の運搬等が無く、短期間に人手を必要とするスイートコーンにおいても事業を実施することとした。組織体制はアスパラとほぼ同様であり、生産者がアスパラ生産組合からスイートコーン生産組合へと変更になっている。

2) アスパラ収穫事業における雇用条件の統一

本事業を行うに当たって重要な検討事項となったのが雇用条件の統一である。一括して募集・マッチングを行うため、紹介先農家によって雇用条件が異なることは学生の不利益になる。また安全面の配慮（危険な作業の禁止・労災等傷害保険の加入・送迎中の事故に対応出来る自動車保険の確認、雇用時間等）も万全を期した。以下具体的な雇用条件を示す。

基本的に事業では調整（受付・マッチング・サポート）のみ行い、実際の契約・雇用時間の調整等は学生と農家間で直接行う。時給は受入農家説明会当日に大学のアルバイト募集掲示板に掲載されている金額をベースに検討した。居酒屋等が850～860円程度、農業者が900～1000円程度で出稿しているため、それらを一定程度上回る水準に設定された。

作業時間は実働8時間（休憩は午前15分、午後15分、お昼1時間を基本とし、その間は無休相当。お昼を除いて8時間半拘束、実働8時間相当）とした。但し実質的には休憩時間は学生の体調や天候・作業量等を勘案しながら調整を行う事とした。残業は当事者間で協議し、双方同意が取れる場合は実施出来る事となった。農業は労働時間制限の適用除外となっているが、今回は8時間を超えた分は125%で支払うものとした（学生が他産業のアルバイトと比較して選択していると考えられるため）。

雇用期間は7月中旬までとし、可能な限りその時期まで雇用頂く。基本的に雨天決行とするが、極度な天候不順や作業の進度等により半日で作業終了となる事もある。期間後の別作業への従事に関しては、状況を見ながら期間中に再度検討とした。

送迎については農家が行う事とした（集合時間・場所等は当事者間で連絡して決定する）。

支払方法は現金日払いを基本とし、相談に応ずるとした。

安全面では、安全に留意し、危険な作業はさせないこととし、労災に加入を義務づけた。万一事故があった場合（送迎時を含む）には基本的に当事者間で対応とした。

服装等は、学生の費用負担を避けるため、高額な装備については市とJAで支援する事とした（長靴、作業服、雨合羽貸与）。手袋については農家側で準備し、支給する事とした。

そのほか技術支援として、5月12日に市農業振興センターにおいて事前に簡単なレクチャーを行い、その場で事業に参加するかどうか最終確認を取る事とした。また、各種トラブル、相談のため、学生からの相談は筆者が、農家からはJAがそれぞれ受け付け窓口となる事とした。

3) アスパラ収穫事業実施体制

以上のような体制を構築した上で、アスパラ生産部会を通じた受入希望農家の募集（JAの集約により風連5戸、智恵文7戸の計12戸の受入れ希望あり、直前で1戸キャンセル）を行い、学生に対しても4月16日のプレアンケート、5月7日説明会等を経て参加学生を募集した。農家の作業希望人数は各戸1~4名であったが、ちょうどの数の場合、2ヶ月間毎土日に作業従事することとなり、休みや大学行事等に対応出来ないため、希望人数+1名で班を組む事とした。班員と農家が個別にシフト調整を行うと繁雑になる為、リーダー役の学生を決め、基本的にはリーダーが班員とシフトを調整し、リーダーが農家と連絡を取り合う形とした。リーダーは作業日誌やアンケートの集計等の作業を併せて依頼し、その対価としてのリーダー手当として支払い、その負担に報いることとした。

このような体制により、受入農家11戸、希望学生数25名、募集学生数36名となり、計68名の応募があった事から、作業可能日数の見込みが多い学生を優先し、学科バランスを考慮して各農家へ割り当てた（学科行事等で全員がお休みすることを避けるため）。その後は確定者説明会を実施して学生に仕組みの説明と班の割り振り、リーダーの確定、農家連絡先の交換等を行い、事業実施となった。

事業の実績及び学生、農家の感想等については後述する。

4) スイートコーン収穫事業における雇用条件の統一

スイートコーン収穫事業においても雇用条件の統一を行った。まず作業期間であるが、8月9日（夏休み開始）から9月末ころまでの約2ヶ月間とした。夏休み中のため、土日に限定する必要性は無いものの、学生は帰省するため長期・連続で従事することは期待しにくい。よって希望する1週間単位で申し込みを受付、その期間中作業に従事してもらう形を取る事とした。ただし、畑の生育の進み具合によって、1週間のうち何日出動になるかは変動してしまうため、その旨をきちんと説明するようにした。農家には条件が悪い場合でも、最低限週3日は作業日を確保して頂きたい旨のお願いを行った。

作業時間・時給は①5:00~10:00と②7:00~12:00の2パターンを基本とした。時給水準はアスパラ事業を踏襲し、早朝の①パターンは+100円の設定とした。そのほかの条件はアスパラ事業と同一である（支払は実働、現金日払い、残業応相談、送迎付き、安全に配慮）。当初は5時という時間帯からあまり学生が応募しないのでは無いかと危惧されたが、時給水準もさることながら午後の時間帯を講義や余暇、他アルバイト等に充てられることから、半数以上が5時を希望するという結果となった。

身支度については、アスパラ事業と同様、長靴、雨具は貸出としたが、夏期はツナギでは暑いと考えられたため、貸与しなかった。

5) スイートコーン収穫事業実施体制

上記の体制の元、学生に夏休み直前に募集したところ、30名強の応募があり、ほぼ全員（マッチングの結果、2日以下しか作業割当ができない学生はお断りをした）を農家に割り当てた。人数は比較的多かったものの、帰省等を挟むため短い作業可能日数の学生が多く、配置には大変苦慮することとなった。可能な限り参加学生がゼロになる農家が無いよう、同一農家に貼り付けではなく、3~4日を一単位として複数の農家を回る体制とした。

農家はアスパラ事業と同様に、JAがスイートコーン生産組合を通じて希望を取りまとめたところ、11戸最大24名の希望となった。

3. アスパラ事業の実績

1) アスパラ事業の実績

表1にスイートコーンの事業も含めた事業概要を示した。アスパラ事業を1期、スイートコーン事業を2期と表現している。また、表2に事業実施に係るスケジュールを示した。表出の内容については前節にて紹介しているため割愛する。次いで表3に参加学生の属性を示した。全員が1年生でありほとんどが女性である。学科はやや看護学科が多くなっている。他学年が存在しない理由は、2年次以降は既に定例のアルバイトがあるため短期・土日のみの参加が難しい事、今野の講義が無い2~4年生(2年生も募集時期にはまだ開講されていない)への訴求が不十分であることが考えられる。表4に農家別作業従事回数を示した。全体で見ると5月は約38人日、6月は73人日、通期では112人日活動していた。同じく表5から個人別の作業従事回数を見ると個人ごと・班ごとに従事回数にやや差が見られる。個別の状況については確認できないが、全体の状況を整理すると表6のようになる。学生1人あたりで見ると平均参加回数は10.0回(半日勤務もあるためフルタイム換算すると6.0回)、最も参加数が多い学生で16回(フル換算9.5回)、少ない学生で8回(フル換算3.0回)である。表7、8に集合～解散時間の集計を示した。注目すべきは集合から作業開始までの時間および作業終了から解散までの時間である。農家まで移動する必要があるため、概ね作業開始の30分程度前から集合・移動することが求められる。一部1時間を超えるケースもあり、将来的な改善が望まれる。表9に従事作業種類と従事割合(MA;複数回答)を示した。MA比は回答数を有効回答数で除したものであり、全体の何割の回答者がその選択肢を選んだかがわかる(以下同様)。アスパラの収穫を中心視しているため、アスパラ関連作業が8割以上を占めている(逆に言えばあまりアスパラに触れなかった参加者も少数存在する)。それ以外ではスイートコーンやかぼちゃの関連作業が多くなっている。表10に学生

表1 援農(有償)ボランティア事業の概要

運営主体	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター (担当教員)
	名寄市経済部農務課(担当課長)
	JA道北なよろ営農部(担当課長)
実施事業	アスパラおよびスイートコーンの収穫・調整を中心とした作業
実施時期	1期:5月中旬～7月上旬 2期:8月中旬～9月末
募集範囲	名寄市立大学 学生(学年問わず)
受入農家	1期:11戸 2期:8戸
参加学生数	1期:36名・延べ112日作業従事 2期:31名・延べ351日作業従事

資料:事業運営資料を元に筆者作成

表2 事業実施に係るスケジュール

日付	内容
H29年5月頃	試験事業開始
11月14日	市役所・農協と事業開始検討について協議
H30年4月11日	アスパラ生産組合全戸へ希望を照会
4月16日	学生向けプレアンケート実施(約180名回答)
4月19日	受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定)
5月7日	学生向け説明会開催(1回目)
5月10日	学生向け説明会開催(2回目)、申し込み締切
5月11日	市役所・農協と班構成や運営体制等について協議
5月12日	作業事前研修会@名寄市農業振興センター、最終意向確認締切
5月15日	参加確定者向け説明会開催(昼休み)
5月18日	市役所・農協と班構成や運営体制等について協議
5月17日	作業班リーダー向け資料配付・作業日誌作成
5月19日	アスパラ収穫事業開始
5月22日	作業服・長靴・雨合羽貸与開始
6月18日	参加学生(リーダー)中間意見交換会
7月1日	事業終了
7月2日	市役所・農協とコーン事業体制について協議
7月3日	スイートコーン生産組合全戸へ希望を照会
7月12日	アスパラ受入農家意見交換会
7月19日	受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定)
7月23日	学生参加受付開始
7月25日	学生参加受付締切
8月8日	参加学生最終確定
8月9日	スイートコーン収穫事業開始
9月17日	事業終了
11月18日	次年度事業体制に対する検討会(市・農協)
12月12日	参加学生意見交換会
12月13日	スイートコーン受入農家意見交換会

資料:事業運営資料を元に筆者作成

の作業環境や作業の感想を示した。従事して間もない5月の通期（約4日間）と最終作業従事日となった6月23～24日のデータを比較した。右上端の「作業が難しい」については5月の段階では回答が分散していたが、6月末には難しいと考える学生がゼロとなり、右下端の「作業に慣れてきた」という回答が増えていることから、数回の作業でも十分に習熟が可能である作業が割り当てられたと考えられる。「作業が楽しい」「やりがいがある」は当初の方が強い感想を持っていたが、作業の慣れとともにやや落ち着く傾向が見える。

表3 参加学生の属性

1年生	36
2年生	0
3年生	0
4年生	0
男性	5
女性	31
栄養	11
看護	15
社会福祉	7
社会保育	3

資料: 運営資料より筆者が作成

表4 農家別作業従事回数(単純集計)

	A農家	B農家	C農家	D農家	E農家	F農家	G農家	H農家	I農家	J農家	K農家	総計	農家一戸あたり 単純平均
5月土日	2	4	4	3	4	3	2	3	2	3	2	32	2.9
5月平日	0	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0	6	0.5
5月計	2	5	6	6	4	3	2	3	2	3	2	38	3.5
6月土日	6	4	5	6	6	8	8	5	8	6	6	68	6.2
6月平日	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	0	5	0.5
6月計	6	4	6	10	6	8	8	5	8	6	6	73	6.6
7月計(休日のみ)									1			1	0.1
総計	8	9	12	16	10	11	10	8	11	9	8	112	10.2
うち平日	0	1	3	7	0	0	0	0	0	0	0	11	1.0

表5 個人別作業従事回数

班 個人	A			B			C				D				E			F			G			H			I			J			K					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36		
全日(8h)	3	5	4	4	8	4	3	6	7	4	7	6	6	6	5	5	7	7	9	6	8	8	5	5	6	7	7	6	4	3	3	6	4	4	4	5		
従事 時間帯	1	1	1	1	0	0	0	1	1	4	0	0	7	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1	2	1	1	1	1	0		
お休み	3	1	2	2	1	4	6	5	4	4	5	9	3	9	4	5	4	4	2	4	1	1	3	3	2	3	4	4	1	4	3	1	3	3	3	3		
従事 回数	8	8	8	8	9	9	9	12	12	12	12	15	16	15	10	10	11	11	11	10	10	10	8	8	8	11	11	11	9	9	9	8	8	8	8	8		
フルタイム換算	4	6	5	5	8	5	3	7	8	6	7	6	#	6	6	5	7	7	9	6	9	9	5	5	6	8	7	7	6	4	5	7	5	5	5	5		
班内 平均	8.0	5.0			9.0	5.2		12.0	6.8			15.3	7.2	5.3	10.0	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	8.0	5.3	7.0	11.0	7.0	4.8	9.0	4.8	8.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0			

資料: 運営資料より筆者作成

表6 参加学生間の作業従事回数の平均値

単純回数平均	10.0
フルタイム換算平均	6.0
最大単純回数	16.0
最小単純回数	8.0
最大フルタイム換算	9.5
最小フルタイム換算	3.0

資料: 運営資料より筆者作成

表7 参加学生の集合・作業開始・作業終了・解散時間の分布

集合時間	割合	作業開始時間	割合	作業終了時間	割合	解散時間	割合
～6:29	14.0%	～6:59	5.4%	～16:59	12.2%	～16:59	5.0%
6:30～6:59	10.5%	7:00～7:29	17.9%	17:00～17:29	66.3%	17:00～17:29	26.0%
7:00～7:29	20.2%	7:30～7:59	26.8%	17:30～17:59	10.2%	17:30～17:59	42.0%
7:30～7:59	46.5%	8:00～8:29	42.9%	18:00～18:29	8.2%	18:00～18:29	14.0%
8:00～8:29	6.1%	8:30～	7.1%	18:30～	3.1%	18:30～18:59	8.0%
8:30～	2.6%					19:00～19:29	3.0%
						19:30～	2.0%

資料: 作業日誌より筆者作成

注: 集合時間、作業開始時間は午前開始分のみ。作業終了時間、解散時間は午後終了分のみとした(午後開始、午前終了データが少なくバイアスが大きいため除外した)

表8 参加学生の集合から作業開始、作業終了から解散までの概算時間の分布

時間	集合～作業開始	作業終了～解散
15分程度	12.1%	17.3%
20分程度	21.5%	0.0%
30分程度	54.2%	64.3%
45分程度	11.2%	10.2%
1時間以上	0.9%	8.2%
平均	26分	32分

資料: 作業日誌より筆者作成

表9 従事作業種類と従事割合(MA)

作業種別	割合
アスパラ関連作業	83.3%
スイートコーン管理作業	14.2%
カボチャ管理作業	12.5%
花卉関連作業	9.2%
タマネギ関連作業	4.2%
水稻連作業	2.5%
その他青果作業	2.5%
その他一般作業	25.8%

資料: 作業日誌より筆者作成

表10 作業従事学生の作業環境・作業の感想の経過比較(5月通期の回答および6月最終従事日)

	暑くて大変			寒くて大変			作業が難しい		
	5月	最終従事日	変化(ポイント)	5月	最終従事日	変化(ポイント)	5月	最終従事日	変化(ポイント)
全く思わない	19.5%	10.0%	-9.5	34.1%	20.0%	-14.1	34.1%	30.0%	-4.1
あまり思わない	26.8%	40.0%	13.2	26.8%	30.0%	3.2	29.3%	50.0%	20.7
どちらでもない	17.1%	30.0%	12.9	24.4%	40.0%	15.6	24.4%	20.0%	-4.4
そう思う	36.6%	10.0%	-26.6	14.6%	10.0%	-4.6	12.2%	0.0%	-12.2
とても思う	0.0%	10.0%	10.0	0.0%	0.0%	0.0	0.0%	0.0%	0.0
	作業量が多い			作業時間が長い			休憩時間をもっと欲しい		
	5月	最終従事日	変化(ポイント)	5月	最終従事日	変化(ポイント)	5月	最終従事日	変化(ポイント)
全く思わない	22.0%	20.0%	-2	22.0%	20.0%	-2.0	41.5%	20.0%	-21.5
あまり思わない	36.6%	30.0%	-7	48.8%	20.0%	-28.8	34.1%	30.0%	-4.1
どちらでもない	26.8%	40.0%	13	17.1%	60.0%	42.9	22.0%	40.0%	18.0
そう思う	12.2%	10.0%	-2	12.2%	0.0%	-12.2	2.4%	10.0%	7.6
とても思う	2.4%	0.0%	-2	0.0%	0.0%	0.0	0.0%	0.0%	0.0
	作業が楽しい			やりがいがある			作業に慣れてきた		
	5月	最終従事日	変化(ポイント)	5月	最終従事日	変化(ポイント)	5月	最終従事日	変化(ポイント)
全く思わない	0.0%	0.0%	0.0	0.0%	0.0%	0.0	0.0%	0.0%	0.0
あまり思わない	0.0%	0.0%	0.0	0.0%	0.0%	0.0	0.0%	0.0%	0.0
どちらでもない	9.8%	10.0%	0.2	0.0%	0.0%	0.0	17.5%	0.0%	-17.5
そう思う	41.5%	80.0%	38.5	37.5%	66.7%	29.2	40.0%	50.0%	10.0
とても思う	48.8%	10.0%	-38.8	62.5%	33.3%	-29.2	42.5%	50.0%	7.5

資料: 作業日誌より筆者作成

注: 6月最終従事日は、ほぼ全班が作業を終了した6月23、24日(土日)の結果である

2) アスパラ事業に係る学生の感想

学生との意見交換会から学生の総合的な感想を確認すると、概ね良い評価が得られた。例えば、「黙々と作業するだけでは無く、お話を聞きながら作業できた」「楽しかったので、アスパラの収穫が終わった後も個別に作業に行く予定である」といったものである。一方で課題としてあげられたのは「土日連続して作業するときに課題が重なると大変」(なのでシフト調整をしている)、「部活のように厳しかった」「残業代について支払われているか疑問である」といった指摘があった。この点に関してはJAを通じて農家へ照会し、厳しい指導は経営主では無く事情を理解していない従業員であったことから経営主から事情をきちんと説明する、残業代については一部システムの理解が不十分であったため、あらためて説明し納得してもらえた、といった対応を行った。また、一部天候の影響で早期に終了した農家があり、今期はそのまま終了となったが、次年度は何らかの対応が期待される(作業が続いている農家で受け入れ等)。

3) アスパラ事業に係る農家の感想

次にアスパラ事業における農家の感想を、農家との意見交換会から確認する。まず、総合評価としては良かった・助かったという回答が多かった。「収穫のピークが鋭く、一人でも多く人手を必要としていたため助かった」「覚えが早く、体力もある」といった作業に関するものから、「若い学生が来てくれることで、家族や従業員が活気づいた。雰囲気が良い」といった印象も聞かれた。

給与水準としては決して安くはないが、短期で来てもらえること・一生懸命に取り組む姿勢が雰囲気を良くする・素直で飲み込みが早いといった感想や、派遣より安く若い人が来てくれて助かった。他のアルバイト

トと比較すると決して高くないのでは、といった印象も聞かれた。シフト制・リーダー制も概ね高評価であり、希望人員+1名は交代でのお休み等を考えても適切な比率であると思われた。作業着等については、作業着の生地が厚いので暑そうだった。薄手の作業着や薄手のヤッケを用意した方が良い、天気が良い日用に長靴では無く園芸用シューズ（地下足袋に近いもの）を用意した方が良いといった意見が見られた。

総合的に見て農家側の満足度は高く、やや送迎の手間はかかるものの、次年度も継続して実施して欲しい、利用したいとの声が多かった。

表11 参加学生の属性

1年生	22
2年生	7
3年生	1
4年生	1
男性	4
女性	27
栄養	6
看護	13
社会福祉	3
社会保育	9

資料:運営資料より筆者が作成

4. スイートコーン事業の実績

1) スイートコーン事業の実績

続いて本項ではスイートコーン事業の実績を図表から述べる。まず参加学生の属性を表11から確認すると、アスパラ事業と同様ほとんどが1年生・女性であり、学科は看護がやや多くなっている。アスパラ事業と違い、参加可能な時期が当人のスケジュールによって大きく異なることから、日々の参加人数にばらつきが生じる。例えばお盆の時期は帰省する者が多いため参加率は低い。この状況を示したのが図1の積み上げ面グラフである。本事業では5時～10時と7時～12時の2パターンで参加者を募集している。濃い色は5時～10時、薄い色は7時～12時を示している。

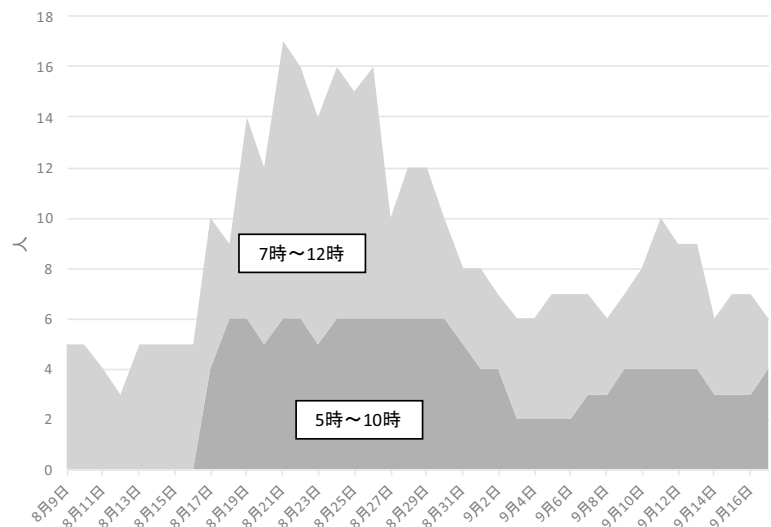


図1 日付・時間帯別作業参加学生数の推移

資料:運営資料より筆者作成

受け入れ希望農家の都合により、7時パターンの農家から受け入れがスタートしている。当初はお盆時期と重なるため参加者は少なくなっている。お盆明け17日頃から全農家が受け入れを開始し、5時パターン6名程度、7時パターン10名程度の計15、6名で進み、8月末か

表12 農家・旬別作業従事回数(単純集計・事業開始時の計画値)

	A農家	B農家	C農家	D農家	E農家	F農家	G農家	H農家
5時～10時	×	×	×	×	×	○	○	○
7時～12時	○	○	○	○	○	×	×	×
8月9日～16日	7	22	8	0	0	0	0	0
8月17日～31日	13	27	15	29	22	29	29	27
9月1日～17日	8	16	6	19	19	25	14	16
総計	28	65	29	48	41	54	43	43
従事日数	28	38	29	30	26	32	29	29
1日あたり従事希望人数	1	3	1	3	3	2	2	2
1日あたり平均従事人数	1.0	1.7	1.0	1.6	1.6	1.7	1.5	1.5

資料:運営資料より筆者が作成

注:数値は計画値である。実際は農家の都合、生育状況、天候、学生の都合等で上下があると思われるが把握していない

ら帰省する学生が増えるとともに参加者数が約半数に減り6~8名で推移している。農家別時期別の作業従事状況を表12に示した。農家によって希望人数が異なるため、人日(表では総計)はその差を反映している。農家の希望人数と実際の割当人数を下段「1日あたり～」で比較すると、概ね希望の半分~7割程度充足できている事が分かる。学生1人あたりの作業従事状況を表13に示した。

表13 参加学生間の作業従事回数の平均値(計画値)

単純回数平均	11.3
最大単純回数	29.0
最小単純回数	3.0
~5回	6
6~10回	10
11~15回	8
16~20回	5
21回~	2

資料: 運営資料より筆者作成

単純平均では11.3回参加、頻度としては6~10回参加が最多階層となっている。

2) スイートコーン事業に係る学生の感想

次にスイートコーン事業における学生の感想を、事業終了後に実施したアンケートおよび意見交換会から

表14 援農ボランティア参加の動機(MA)

項目	割合	MA比
純粋なアルバイトとして	40.5%	89.5%
農業に興味があった	21.4%	47.4%
農作業体験として	21.4%	47.4%
早朝からという作業時間帯が都合良かった	7.1%	15.8%
食・農を知ること自分の専門に役立ちそうだった	4.8%	10.5%
農家と交流してみたかった	4.8%	10.5%

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

整理する。表14は援農ボランティア参加の動機を複数回答で尋ねたものである。MA比ではアルバイトとして捉えている学生が9割近くおり、賃金水準が重要な動機付けになっていることが示唆される。また、農業・農作業に興味があったという学生も半数近くおり、金銭面以外に得るもの(経験・体験)

表15 有償で農作業に参加した経験の有無

項目	割合
はじめて	73.7%
数回経験あり	10.5%
何度も経験あり(農家子弟含む)	15.8%

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

も重視する傾向にある。表15は農作業経験の有無を尋ねたものである。ほとんどが「はじめて」であった。表16ではスイートコーン以外の作業があったことが示されている。表17から分かるように、天候が理由で収穫が一時ストップすることがあり、結果として予定より参加日数が少なくなったケースが多かった。天候の影響とはいえ、学生にとっては大きな期待損失である事から、最大

表16 コーン関連作業以外の作業例

項目
大豆関連作業
各種除草
青果物収穫・定植
ばれいしょ・かぼちゃの収穫

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

限の努力と工夫が求められる。表18で賃金水準の評価を確認すると、早朝にもかかわらず

表17 作業従事回数の予定数と実際に従事した数の差異

項目	割合
ほぼ予定通りだった	31.6%
予定より少なくなった(天候が理由)	68.4%

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

1000円という水準が満足度を高めていることが示唆される。900円水準では、自由記述

表18 賃金水準の評価

項目	5時~(¥1,000)		7時~(¥900)	
	割合	MA比	割合	MA比
非常に良かった(早朝・労働の大変さを考えてもとても良かった)	46.2%	6.7%	6.7%	6.7%
良かった(早朝・労働の大変さを考えても良かった)	38.5%	33.3%	33.3%	33.3%
普通(早朝・労働の大変さを考えると普通の水準)	7.7%	53.3%	53.3%	53.3%
悪かった(早朝・労働の大変さを考えると不十分な水準だった)	7.7%	6.7%	6.7%	6.7%

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

として居酒屋のアルバイトでも同水準があるため、金額での優位性は無いとの回答もあることから、金額以上の“ボラン

ティア”の意味を学生に還すことが求められていると言えよう。表19では今後の参加意向について尋ねているが、7割近くが何らかの形で援農ボランティアに今後も参加してみたいと回答している。賃金水準のためか、朝5時台の参加を希望する層が6割弱と多くなっている。一方で、改善を要する点もいくつか指摘されている。表20と自由回答、意見交換会でのコメントから学生の考える課題を整理しておきたい。表20に複数回答で学生に尋ねた改善を希望する項目を示した。最も選ぶ学生が多かったのが時給単価のアップである。

自由記述でも「居酒屋バイトでも900円で同じなのでもう少し上げて欲しい」との回答があった。ただし、全体の6割は改善点として挙げていないこと、スイートコーンの生育の関係で比較的重労働な他作物の作業が連続したこと、“ボランティア”と“アルバイト”の意識の違いを農家や学生、運営間で十分に議論、共有できていなかったことが挙げられる。可能な範囲内で時給を上げていくことも必要であるが、一方でボランティアの意味を双方が理解し、金銭以上の対価を還元していく取り組み（会話の中にある食農への理解）を進めていく必要がある。他には天候等による予定変更（作業中止）、作業服の提供も挙げられていた。いずれも次年度は可能な限り他作業・農家間での紹介等や薄手の作業服の検討などが必要と思われる。アスパラ事業の時にも挙げられ

ていたのが農家との連絡手段である。現状ではほぼ直接電話連絡が基本となっている。Webを通じた配信など、電話以外の連絡手段を求める意見があった。

自由記述では、一見「大変だった」との記述が多く、早朝作業や慣れない農作業の大変さがあったと推察されるが、多くは「大変だったが、～が良かった」と書いており、概ね良い評価が得られた。「農業や食に興味を持った」「農家と交流することが出来て大変さや苦労を知れた」「苦労の過程があつて私達は生きていけると考えたら良い経験をさせてもらった」といった内容である。

意見交換会では、想定していた作業と実際の作業に乖離があったことが指摘された。特に本年は雨天による生育遅れがあり、スイートコーンの作業が無い時期もあった。生育遅れにより作業ありませんとキャンセルするのは簡単だが、農家側でも折角学生が時間を取ってきてくれるという気概に答えるため、可能な限り他作業を作り出して依頼していた。結果として、スイートコーンよりも重労働となるかぼちゃ関連作業や単調な作業が続く除草作業が中心となり、想定との乖離が生じてしまった。次年度以降は事前の説明の際にこのような他作業による代替が起こりえること、それは作業機会を捻出するための工夫である事の周知徹底が必要であろう。そのほか、作業服のデザイン（色）の改善や7月でも朝は寒いのでツナギが欲しかったこと、一人では心細いのでなるべく二人以上で配置して欲しい事、学生が本事業で入る事を事前に伝えていないケースでは既に農家で働いているパートさんとの関係性が難しかったため一言朝のミーティングの時などに触れて欲しい、といった要望があった。次年度に生かしたい。

3) スイートコーン事業に係る農家の感想

スイートコーン事業における受け入れ農家の感想を意見交換会でのコメントから整理しておきたい。

基本的には「学生は一生懸命よくやってくれた」との評が多かった。生育遅れによりスイートコーンの作業が無く、他の作業（かぼちゃや大豆）中心になってしまったことは農家側も心配しており、ギリギリの対応であったことが示唆される。今回は概ね3～4日で交代となったが、本当は連続して同じ方に来て欲しいとの意見があった。次年度実施検討の際に、各農家に可能な限り空白期間がなくなるような配置（＝3～4日で交代）がよいか、空白が空いても同じ学生が良いか事前に確認を実施すべきである。給与の支払について、源泉徴収票を発行する場合の現住所把握が難しい事が挙げられた。現在、源泉徴収票を発行するためにはマ

表19 今後の援農ボランティア参加意向

	項目	割合
参加意向	積極的に参加してみたい	29.4%
	参加してみたい	41.2%
	どちらでもない	29.4%
	参加したくない	0.0%
参加希望時間	早朝(5時～)	59.3%
	朝(7時～)	37.0%
	1日(朝～夕)	3.7%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

表20 改善希望項目(MA、重視するもの3つまで)

項目	割合
時給単価UP	35.3%
雨天で作業中止の際の対応(別農家の紹介など)	17.6%
お休みや作業日変更のしやすさ	14.7%
作業服等の支給	14.7%
農家との連絡方法(個別の電話では無くWebフォームなど)	8.8%
労働環境(時間帯や作業場の温度など)	5.9%
作業日数を長くしたい(1農家の作業が終わったら別の農家で作業)	2.9%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

インナンバーの他に、現住所では無く住民票の住所、生年月日が必要となる。3~4日で交代する場合、その依頼・収集作業が繁雑となるため、学生説明会の際にその旨一括して案内して欲しいとの意見があった。また、作業時間と給与の計算方法に関しては、スイートコーンの出荷締切時刻(11時)との関係性や生育によって早く終わったりすること、5時パターンの場合は途中で軽食休憩を挟む場合もあるため、毎度の時給計算が煩雑になる。スイートコーンに限っては日給(定額)制で支払った方が良いとの意見もあった。一部、作業が遅い学生もいたとの声もあったが、総論としては人がいないと出来ない仕事であり、個人差は許容するので継続的に実施したいとの結論となった。

5. まとめ

このように、「名寄市立大学学生援農ボランティア」研究事業は、昨今の労働力不足下における労働力補完を主目的としながらも、単なるアルバイトだけでは無い付加価値として、名寄ならではの体験・経験を提供し、食農を考える契機とすることが出来た。

その体制として、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター・名寄市農務課・JA道北なよろ営農部営農課が協力し、農家・学生双方にとってより良い機会を提供できる場を作る事ができた。具体的には雇用条件の統一・安全面の配慮・ボランティアとしての意義の共有など、単なるアルバイトではない、地域と学生がより良い環境で働き・連携できる取り組みを進めることが出来た。

一方で、いくつかの課題も見えてきた。農業の性格たる、天候不順等による予定変更(お休み)の発生である。年間を通じた雇用関係であれば、突発的な休みはむしろ歓迎すべき事態であるが、短期間で働きたいと考える学生にとって、突発的な休みは収入が確保できないという点でマイナスが大きい。特にボランティアの意識を持って参加する学生は、他のアルバイトをキャンセルして援農ボランティアへ参加するケースすらあり、農家間での作業の融通など何らかの形での対応が望まれる。また、アスパラ以降も短期的な作業需要はあり、学生側にとっても確約はできないが、短期間であれば手伝いたい、との意向も出てきている。よって、今後はより短期のスポット需要を結びつけるような仕組みが必要とされる。その際には、Webを用いたより簡易的な仕組みで双方が情報交換を出来るようなサービスが必要であろう。また、研究面では、送迎負担に関する研究を実施できなかった。次年度は、送迎サービスを実験的に実施し、その課題抽出を行いたい。また、参加学生に対するアンケート及び意見公開会の回収・出席率の向上を目指す対策も実施していきたい。

以上のように課題はあったものの、農家・学生にとって一定の意義を見いだすことは出来たと考える。JAから学生への感謝の印として年末にもち米(もち)の提供を受け、無料でお雑煮を振る舞うきっかけともなった。

次年度も関係各団体と密接に連携を取りながら、課題に取り組み、より良い地域農業と学生・大学の関係性構築に向けて、研究事業を進めていきたい。

【付記】

本稿は、平成30年度名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター課題研究による「農業雇用労働力狭隘下における学生援農アルバイトによる労働力支援事業に関する研究」における成果の一部である。